

---

# チートに原作ブレイクの旅

鍛冶野 雅

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

チートに原作ブレイクの旅

### 【Nコード】

N6125S

### 【作者名】

鍛冶野 雅

### 【あらすじ】

神様の実験に協力する（させられる）ために神隠しにあった主人公、鍛冶野雅<sup>かじのみやび</sup>。実験の内容は：いろんなアニメの世界の原作ブレイク！？ってことはなんでもやっていいわけ！？

これは、チートな能力を貰った主人公が様々な世界を原作ブレイクしまくりながら旅する物語です。

不定期更新ですのであしからず：

## プロローグ

さて、状況を整理しよう。

- 1・俺はお気に入りの小説を数冊まとめて買うために家から本屋に向かった。
- 2・お気に入りを数冊見繕ってまとめて購入し、わくわくしながら家に帰ろうとしていた。
- 3・その途中で林から悲鳴が聞こえ、怖いもの見たさで林に突入する。
- 4・突然視界が暗転する。

「…で、気が付いたらこんな真っ白なただっ広い空間にいた…ってか？」

ふむ、とりあえずこう言ってみようか。

「なんでじゃボケー！」

「誰がボケですか！？失礼な方ですね！」

む？

「フーアーユー？」

「何故に英語！？しかも思いっきりカタカナ読み！」

そこにいたのは、なんか白い服着た16歳くらいの少女だった。

「いやなんとなく？で、いくつか質問があるんだけど？」

「あっはい。どうぞお聞きになってください。鍛冶野雅<sup>かじのみやび</sup>さん。」  
「じゃあ、聞きたいことを纏めて言うよ。まず…

1. ここはどこなのか。
2. きみは誰なのか。
3. どうして俺の名前を知っているのか。
4. 何が目的なのか。

…とまあひとまずこんなところかな。じゃ、答えてもらうよ。」

「わかっています。でわ…

1. ここは天界。一応複数の世界の管理をしているところです。
2. 私はウルド。あなたの世界で言うところの運命の3女神の1柱ですね。
3. 2で説明したとおり、それでも運命の女神ですので、あなたの名前なんてすぐにわかります。

…で、4についてはこちらがお願いしたいことと関連しています。」

ん？おねがいしたいこと？

「なんだ？話を聞いてからじゃないとYESとは言えないぞ？」

「わかっています。それは、いろんな物語の世界に行ってその世界の歴史を変えてほしいのです。」

「それは、俗にいう原作ブレイクをしろってことか？」

「はい。それに伴う力は差し上げます。」

「ふむ。まあそれについてはいいけど、なぜ？」

「非常に言いにくいのですが、神々の実験なんです。」

…は？実験？

「実験ってどういうこと？」

「ようするに、形が決まっている入れ物に本来必要ないものを放り込んだらどんな反応を起こすかということなんですよ。」

「ふむ、じゃあなんでその役目が俺になったわけ？ こう言っちゃなんだけど、俺は自分自身がそこらにいる人より優れてると思っ  
ないよ？」

「……………えっと……………それはその…」

ふむ…この様子から察すると…

「もしかして、完全なる偶然？」

「……………はい。実はあなたが通りかかった林で悲鳴を上げて、そこ  
に一番初めに来たものに決めてしまおうということだったんです。」

な…るほど…

「因みに、俺は帰れるわけ？」

「ごめんなさい、無理です。あなたをここに招くための術は片道の  
今回限りの代物だったんです。」

「…はあ。じゃあいいや。で？ どんな能力をいくつももらえるわけ？」

もういいや。さっさと能力とか貰ってさっさと行こう。

「はい。ではまず不老不死と身体能力強化、魔力や気はほかの方と  
は比べ物にならないほどにさせていただきます。」

「ちょっといいかい？」

「なんですか？」

「不老不死はいいんだけど、そこに外見年齢をコントロールできる  
能力を付与してほしい。」

「別にかまいませんよ。でも急に加えるので時々暴走するかもしれませんが。」

…暴走？

「正確にはコントロールが利かなくなります。しばらくその姿で固定される恐れがあるってことですな。」

「まあそれくらいならかまわないよ。」

「そうですか。…では、加えておきますね。」

ではそれ以外の能力などを指定してください。数は特には制限しません。」

「え？それでいいの？」

「はい。実験の結果をしっかりと残していただかないといけないので、思いっきり反則<sup>チート</sup>クラスにしていただいて構いません。」

「なるほど、じゃあまずはアイテム作成能力がほしいんだけど。」

「アイテム作成？」

「そ、厳密には…」

1. 俺が『道具』だと認識しているものを何かの素材を消費することで作成できる。
2. 材料に明らかに非倫理的なものが入ってる場合は作れない。
3. 作成したアイテムは俺が認めた人だけが使用できる。
4. 2に関わらない限りはどんな素材を使っても、それっぽいものを使っていればよい。

…ってな感じ。」

「了解しました。他には？」

「んー、一つ聞きたいんだけど俺の幸運ってどうなってる？」

「幸運ですか？そこは一般人並ですね。身体能力には含まれませんので。」

「じゃあ、『絶対幸運』が欲しいんだけど。」

「わかりました。」

他にはありますか？

「じゃあ、とっておきのある能力があるんだけど…」

「？なんですか？」

「…『能力を作る能力』…」

「…まあいいですけど…よくそんな能力思いつきますね…」

「いやね？友達とあれこれ言いながら思いついちゃって、なかなか頭から離れなかったんだよね。」

「作っておきますけど、これなら初めのやつ要らないんじゃない？」

「いや、あっちは常時発動。こっちで作った能力は使いたい能力を選択しないといけないっていう制限がある。」

「なるほど。ではこゝち「ちょいまち」…なんですか？」

「いやね？『瞬間記憶能力』と刀語の七実の『見稽古』がほしいのよ。作った能力覚えておきたいし。それぞれの世界の技とか使いたいし。」

「わかりました。ではこれを基本情報としておきます。外見はどうします？」

「ん？不細工じゃなきゃどうでもいいよ。」

「わかりました…（面倒ですからついでに魅了も限界まで引き上げておきましょうか）」

ん？なんか嫌な予感がするけど…まあいいか。

「で？初めはどこにいくわけ？」

「初めは『魔法少女リリカルなのは』の世界に行ってくださいます。」

「ん？ってことはデバイスってのが必要なんじゃない？なしで魔法使ったら怪しまれるぞ？」

「ああ、忘れてました。ついでに設定してしましましょう。待機状

態の形状はどうします？」

「んゝ。銀色の懐中時計かな？よく持ち歩いてるし。」

「…はい。起動状態は？」

「俺のイメージ道理の武器に変化するってのはだめ？」

「構いません。ではその状態のインテリジェントデバイスをお作りいたします。では向かっていただきますね？」

「どうやって？」

「そちらの光るリングの中に入ってください。転送します。」

「了解。デバイスは？」

「渡ったら持つてるようにしますので。では行ってらっしゃいませ。これからよろしくお願いしますね。」

「あいよ。よろしくな」



## プロローグ（後書き）

というわけで始めました新小説！

今回こそはしっかり描き続けます！

稚拙な文章ですが、応援よろしくお願いします！

## 第1話 降り立ったるは、海鳴の地！

皆さんこんにちは。鍛冶野雅です。早速ですが問題です。

俺は前回ワープゾーンっぽいところを通ってなのはの世界に移動しました。

では、今現在どこにいるでしょうか？正解は・・・

……高度2000mほどのところから、大絶賛落下中です♪

「何故だあ~~~~!？」

なんで俺は落下してるんだ!? 畜生! だれか説明しやがれ!

『もしもーし? 聞こえてるー?』

おおっ!? この声は!？」

「ウルド!? どうなってんだ!？」

『えっとねー? 場所を海鳴市にしたまでは良かったんだけどね? 高度の設定を忘れちゃってさー。』

まあ、死にはしないわけだし、がんばってねえー?』

は?

「ふざけんなー! 死ななくても痛いだろうが!？」

《大丈夫です。マイマスター。》

「うお!? 誰だ!？」

《マスターが指定したデバイスです。名前は設定されていません。使用するには名前の登録を。》

「すれば助かるのか!？」

《Yes. 名前を設定すればバリアジャケットおよび魔法が使用できます。》

「わかった! お前は雲のごとく姿を変え、道化師のごとく捉えどころのない姿! 『クラウン』だ!」

《『クラウン』。登録しました。』

マスター、叫んでください。セットアップと。》

「おう! クラウン! セット、アープ!」

《Set Up!》

その瞬間、雅の体を光が包み、衣装が変わっていく。光が収まったとき雅の服は、黒の袖なしハイネックの上着に、少々裾の太い短パン、革で出来たブーツ、腰のベルトには数個の大き目のポーチ&でかいはさみとそのホルスター、頭に布を巻いたバンダナ、指に切れ目が入った指輪という、わかりやすく言うと、「仕立屋●房」のマクモの服装である。

「うし！で、どうすればいい！？」

《空を飛ぶイメージを！それで飛べるはずです！》

雅は自身の服装を見てから、空を飛ぶイメージをする。その結果が羽を模したマント、フェザーマントになるのもしろうがないと思う。

バサッ！

「ふいー、アブねえアブねえ。助かったぜクラウン。これからよろしくな。」

《はい。よろしくお願いします。それとマスターに報告が。》

「ん？報告？なんだ？」

《はい。私は武器形態を自在に変更できますが、それはバリアジャケットも同様となっています。》

「ってこたあなんだ？この服装も自由自在ってことか？」

《はい。しかし制限もあります。あくまでマスターが知っている服装しか選択できません。》

「なるほどな。でも応用は効きそうだな。

……っとひとまず降りようぜ。」

《Yes, Sir》

雅は地上へと飛んでいく。

「クラウン、ここで人目につかないのはどのへんだ？」

《おそらく山のほうなら人もいないかと。今日は平日のようですし。》

「あいよっと」

そのまま山へと向かい、森の中へと降りていく。

「いよっと、着地成功！じゃ、クラウン待機モード。」

《Yes, sir》

雅がまた光に包まれ、おさまったときには雅は私服に戻っていた。

「ふう、…っておや？なんか視点が低いような？」

《魔法を使いますか？》

「いや、能力も確認したいから、そっちをつかう。」

雅はそう言うと、アイテム作成を始める。

「さってと！まずは鏡の材料を作るか。材料は…土でいいだろ。」

《マスター、なぜ直接鏡を作らないのですか？》

「ああ、もう一つの『能力を作る能力』で『仕立屋●房』の『鏡職人』の能力作って試そうと思ってる？」

「そうすりゃ一気に確認が済む。」

《なるほど》

そうこう言ってる間に鏡の材料が完成する。続いて鏡を数枚作り始める。

唐突だがここで『<sup>マスターピース</sup>職人』について説明しようと思う。彼らが作った作品には不思議な力が宿り、彼らは作った作品や自身の能力、作品

を作る道具を武器にして戦うのだ。

「っと完成ってか？」

雅の手には数枚の小さな鏡がある。

《マスター？流石に小さくありませんか？》

クラウンがそう言いたくなるのもわかる。なぜなら雅の作った鏡は一枚一枚がカードくらいの大きさしかなかったからだ。これでは顔全部を映すこともできない。

「みてなって！」

そういいつつ一枚を何も無い空間に投げると、鏡はじょじょに大きくなり、姿見くらいのサイズになった。（ついでに言えば宙に浮いている）

《…なるほど、納得しました。》

「だろ？さってと、今の姿は…」

…は？

…クラウン？俺は寝ているのか？

…どう見ても鏡には5歳くらいのがきしか見えななんだが？」  
《NO. 私にもそう見えます。おそらくマイスターの言っていた暴走というものでは？》

「……………ま、……………ま

.....マジかよー！？」

この日、海鳴市に、  
『昼の森から叫び声が聞こえる』  
と言う都市伝説が生まれた。



## 第2話　これが未来の魔王？

どうも！前回5歳のシヨタボディーになった主人公、鍛冶野雅です。

「さて、これからどうするか…」

《どうしたんですか？》

「いやな？さっきから何度も年齢変更しようとしてるんだけどできないんだよ。

こんな年齢じゃどっかで雇ってもらうこともできん。マンションの部屋も借りられん。

なにより金もない。」

《お金に関しては幸運があるのですから》

それもそうだ。

「でも住むところの問題もあるしな。さすがに部屋までは借りれんよ。保護者もないし。」

《ではこれからどうするんですか？》

ふむ、これからか……

「まずはこの山を下りる。で、どっか駅前なり交番なりを探す。ま

あ出来れば前者だな、後者はそのまま保護されかねん。」

《何故駅前なのですか？》

「あのなあ、ちょっとは自分で考えろ。駅前とかのその町の主要箇所にはその周辺の地図があるだろう？それを見て行動する。」

《なるほど、理解しました。》

・  
・  
・  
・  
・  
・

三時間後

「さて、この周辺の地理は把握した。人に聞いて翠屋の場所もわかった。ってなわけで早速向かう。」

《なのは、という方に会うのですか？》

「ま、一目見とこうかなとね。」

クラウンとそんなことを話しながら翠屋に向かう。どうやら今日は平日のようで人がいないため、普通に声を出しながら話せる。やっぱりこういう時に話せる相手って重要だね。

「……ん？」

《どうしました？マスター》

「いやな？今その公園からなんか声が聞こえたような気がするね。ちよっと気になるから見に行ってみるよ。クラウン、しばらく黙っててくれな？」

《了解》

さて、なんかイベントが発生しそうだね。

そう考えながら公園に入り、ほどなくして栗色の髪をツインテールに縛った泣いている女の子を見つけた。

…ってかあれってもしかして…

「…うう…ぐすっ…」

「さて、どうしたのかな？」

「ふえ？」

声をかけると、その子が顔を上げる。

…ふむ、この顔つきは…あの方の可能性が90%まで上がったぞ？

「ふむ、まずは自己紹介からしたほうがいいね？俺は鍛冶野雅。雅とでも呼んでくれ。」

「えっと…高町…なのはなの…」

あゝ、やっぱ将来の魔王様か。

「ふむ、じゃあなのはちゃんと呼ばせてもらうよ？で、なんでなの

はちゃんは泣いていたのかな？」

さて、ここからの話を割愛し纏めると、彼女の父親が事故で入院してしまい。家の中がギスギスしている。そのため自分はいいい子ではないといけないということらしい。

「はあ、あほかね君は？」

「な！あほってそれh「だれが何と言おうともあほだよ。」むう…」

「まあ聞きなつて。」

あなの？まず子供、特に小学生にもなつてない子にとっての仕事は親に迷惑をかけることなんだよ。

とくに、今みたいに家の中の空気がギスギスしてるんなら、そういう『いつもと変わらない』ってことがさりげない清涼剤になるんだよ。」

「そう…なの？」

「そういうこと！わかったかな？わかったなら元気よく『はい！』と手を上げよう。」

「あ、はいっ！」

「よし！そんないい子にはいいことがあるとおもうよ？」

「いいこと？」

「ふふっ、それはお楽しみさ。今日は家に帰りな。夕方か夜には何かあると思うよ？」

「わかったの。…また…あえる？」

「あえるかもね。じゃあ、またね？」

「またなの！」

さてつと…じゃあ行くとしますか？

《マスター？いったい何をするつもりですか？》

ん？なにをするかって？じゃあ、ヒントをあげよう。これから向かうのは…

……………病院さ！

### 第3話 新能力作成!

さて、前回病院に向かった俺とクラウンだが、いまおれたちは…

「さて、ここはどこでどの病室だ?」

《いや、受付で聞きましょうよ》

病院内で大絶賛迷子中です。

「いやだってさ、俺前の世界でも病院にはあんまり行かなかったしさ?それになのは親父さんの名前知らないし?」

《…もっと計画的に行動してください。彼女の父親の名前は高町士郎さんです。》

「士郎さんね?士郎、士郎っと…ん?」

俺は足元にカプセル状の薬が落ちてるのを見つけた。

《マスター?そんなものどうするんです?》

「いや、これは後で使える気がするからね。一応もらっておこう。」

そういつて薬をポケットにしまいこむ。

「さて、士郎さんの病室は…ってここじゃね?」

《はい?なにがです?》

「いや、士郎さんの病室。この目の前の部屋じゃね？」

《なにを言ってるんですか。そんなご都合主義あるわけ…》

俺たちの目の前にあるネームプレートにはしっかりと『高町士郎』と書かれている。

《…なんですかこのご都合主義》

「俺に聞くな。とりあえず部屋はわかった。しばらく屋上に隠れるぞ。今からじゃ治療は出来ないし見つかるからな。」

《了解。でもそれまでどうするんです？暇ですよ？》

「さっきの錠剤を改造する。あるアイテムに作り替えるのさ。」

俺たちは屋上に場所を移した。

《で？その錠剤をどうするんです？》

「こいつを改造して、『薬師』のマスターピースのツール、ウイルス病毒研究室ラボにするんだ。」

《それはどんなふうに使うんですか?》

「ん? 『ドクター医者』のマスターピースで体内に埋め込む。」

《…それは大丈夫なんですか?》

「問題ねーよ。さて、作業…開始!」

……少年作業中……

「……うし! 完成!」

《お疲れ様です。》

「ああ、このまま埋め込むよ。」

マスターピース・『ドクター医者』発動!」

さて、こいつを腹のあたりに埋め込んでと…うわ!? 流石にちと痛いしぐろいな。さっさと終わらせよう。

「さて、士郎さんの治療に行くか。」



《どうやって治療するんですか?》

「まずは『ドクター医者』で診察。スキルメーカーそのあと能力作成で回復魔法みたいなもの作って治療する。」

《了解》

そんな会話をしながら俺たちは士郎さんの病室へ入る。

「さて、『ドクター医者』発動、診察を開始」

ふむ、肋骨とかいろいろと罅はいつてるな? 他にもいろいろとまあ…よく死ななかったなあ?

ま、その分昏睡状態になってるんだろ…

《マスター、終わりましたか?》

「ああ、生きてるのが奇跡って感じた。まあこれくらいなら治るだろう。」

『スキルメーカー能力作成』発動。…」

《?どうしました?》

「いや、名前どうしようかなーって」

《なにかのゲームから流用したらどうです?》

ふむ、まあこの世界にや有名ゲームじゃなけりやないだろうしな。そうすっか。

「じゃあ、…『ヒーリング』!」

そうすると見る見るうちに士郎さんの傷が癒えていく。ってこのままじゃ士郎さん目を覚ますんじゃない?

「…うつ。…いったいなにが…? って君は?」

あ、やっぱり。

「あゝ、とりあえず怪しいものじゃないです。俺は鍛冶野雅。あなたのお子さんであるのはちゃんの願いをかなえるために来ました。…というか単なるお節介焼きなんですけどね。」

「なのはの願い? 君はなのはの友達かい?」

「ええ。あなたが入院して、ご家庭がぎこちなくなっているらしくって、まあ甘えたいさかりですからね。っと話が少しそれたっすね。それですn「…高町さん?」…って看護師さん?」

「…高町さん、目が覚めたんですか?」

「えっと、はい。一応「大変!ご家族に連絡しないと!」…忙しい人だね。」

士郎さんがそんなことを呟いているが、俺はそれどころではない。

「『クラウン…これ逃げたほうがいいかな?』」

《『それでもいいかもですけど、名前も顔も知られてますよ?どの

みち無駄かと思われます』≫

だよなー。これはあきらめるか。

さて、これは嫌な予感がするぜ…

### 第3話 新能力作成！(後書き)

感想お待ちしております。

## 第4話 高町家大集合！

さて、今俺の前では高町家が感動の再開をしております。

……俺そっちのけで。

これもう帰っていいですか？…って家がないんだ「雅君！」 ったってお？

「何かな？なのはちゃん？」

「雅君がお父さん治してくれたの？ありg「いやいや、違うよ？」ふえ？」

「俺は君のお父さんが元気になるようにお祈りしただけだよ。神様にね？」

たぶん神様のおかげじゃない？」

「そうなの？でも、それでもありがとうなの！」

「ふむ。じゃあ受け取っておこうかね。どういたしまして。」

危ない危ない。今はまだ魔法や能力のことは隠しとかないとね。

「さて、じゃあご家族を紹介してくれないかい？なんかこっち見てるからね。」

しかもなんか殺気みたいな感じr…感じるどころか隠す気もないねこの兄さん。  
シスコン

「うん。お母さん、今日お友達になった雅君なの！」

「初めまして。鍛冶野雅といいます。」

「あらあら、初めまして。高町桃子です。あなたが士郎さんを治してくれたのかしら？」

「いえ、なのはちゃんにも言いましたけど俺は祈っただけです。『信じる者は救われる』ですよ。」

ま、嘘だけど嘘じゃない。確かに俺は祈ったのだから。魔法だけど。

「あら、そうなの？」

「ええ、そうなのn「おい！貴様！」：なんですか？」

「さっきからなのはの名前を気安く呼ぶな！」

：なるほど、これが本物のシスコンか。初めて見たな。

「あなたに言われたくないですよ。「なにっ！」なのはちゃんの話聞いてみれば、お宅の空気がギスギスしていたのに一役買っていたらしいじゃないですか？いくらお父さんが入院して気が立っていたとしても、妹に気を使わせるのはダメダメです。」

兄は妹を守るべし。これがこの世の真理なり。

「言わせておけば！家の道場に来い！勝負だ！」  
「やめなs「わかりました。」雅君？」

「上等です。一回叩きのめします。」

その自信を壊してやる！

「あれ？私空気？」

…美由紀さん忘れてた。

## 第4話 高町家大集合! (後書き)

感想お待ちしております。



## 第5話 対・シスコン戦！

さて、前回恭也さんに本音を吐露して喧嘩を吹っ掛けた僕ですが……

「ほら！病院での威勢はどうした！」

「うわっ！？あぶな！？」

……………ぶっちゃけピンチです♪

いやー、御神流っていう剣術のことすっかり忘れてたよ。速いし二刀流だから手数多いし…

しかもともに戦闘経験なんかない上に子供の体だしね。かろうじて見えてはいるけど体力的にもきついついっ！？って今頬を掠ったよ！？

「くっ！いい加減当たれ！」

「いや当たったらまずい勢いですからねそれ！？ってか妹と同じくらいの子供にそんな即死クラスの攻撃はどうかとお！？」

「今のも躲すか！」

あーもう！魔法使うわけにもいかないし能力作ってる余裕なんかないしアイテム作るのも魔法ばれに繋がりそうだから使えないし……

…あれ？これ積んでない？つか、鍛冶野雅の旅ここで終了？みた  
いな？

………流石に勘弁！

「はぁ…はぁ…はぁ…！」

「はぁ…よくここまで耐えた！だが！次の一撃で決める！」

—神速—

っ！？まさかこれが神速！？さすがに見えな…「クウ」っておな  
かがすいて力が…

—カクッ—

そういえば、こっちに来たのが昼頃でここまで何も食わずにいたか  
ら…

そんなことを考えながら俺は背中から倒れこんだ。すると、上がつ  
ていた足の裏に何か変な感覚がある。

—キーン！—

「vdaf nahnaf hufbubvoui q!」

何か男にとって嫌な音と、恭也さんの聞き取れない、明らかに日本語ではない悲鳴が聞こえてきた。

チラッとそちらを見ると恭也さんが股間を抑えながら呻いている。

……うん、襲われてたのは俺だけだあえて言おう。  
ごめんなさい。

「やれやれ、ようやく終わったのかい？ すまなかったね、雅君」

っと、士郎さんだ。

「いや、僕は平気ですけど…正直恭也さんが大変なことに…」

「ん？ どうかしたのかい？」

「その、僕が空腹で後ろに倒れた時に上がった足が、すごい速さで突っ込んできた恭也さんの股間にカウンター気味に入ってしまったて……」

「……（汗）。ま、まあたまにはいい薬だよ、うん。

……それより雅君、さっきおながすいたって。」

「あ、はい。実は昼から何も食べてなかったもので…」

「そうかい。なら家で食べていきなさい。ちょっと話したいことも

あるしね。」

「いいんですか？ また恭也さんに狙われそうな気が…」

「大丈夫だよ。私から言っておこう。……それにこれならしばらくは動けないだろうし（ボソツ）」

なんか最後がよく聞こえなかったけど、正直助かる。お金なかったしね。

まあ、なんか聞かれてもいいように言い訳を考えておきますか！

そつれよつりごっはん♪

## 第5話 対・シスコン戦！（後書き）

感想待ってます！

## 第六話 そんなに簡単に決めていいのか？（前書き）

皆様お久しぶりです。

リアルが忙しい＋創作意欲が湧かないということで放置していました。

また書き始めたいと思います。

## 第六話 そんなに簡単に決めているのか？

さて、前回恭也さんに不意打ち気味に勝ちました、雅です。俺は今…

「雅君。家の養子にならないかい？」

士郎さんから養子縁組の話を受けています。

…さて？ どうしてこうなった？ ちょっと思い返してみよう。

~~~~回想中~~~~

俺は恭也さんを放置して高町家で夕食をごちそうになっていた。

「そういえば雅君。君の家はどこなんだい？ このあたりでは見かけない顔だが。」

「ごくくん。…家ですか？ ないですよ。」「」「は？」「」「気が付いたら今持っている道具含めた持ち物だけ持って一人ぼっちでしたから。」

「ということは、ご両親は？」

「知らないです。まあ、これまでも何とかなりましたし。…警察に補導されそうになる以外は。」

「…どうやって生活していたんだい？ お金は？」

「基本は旅しながらホームレスみたいな生活ですかねー。お金に関

してはいろいろと物を作る知識がなぜかあったんで、作ったもの路上で売って稼いでました。」

嘘です。この世界に来たばかりですし、そんな生活していません。

「いやー、でもさすがに危なかったですよ。こないだ同じ事やってたら警察の方に商品没収されちゃって、補導されそうだったんで商品あきらめて逃げたんですけど、お金も材料も昨日からちようど尽きちゃって、こりゃ詰んだかなってところでなのはちゃんに会ったんですよ。」

「なるほど。…ところで行くあてはあるのかい？」

「んー。そんなもん無いですね。まあ近くで落ちてる木とか拾ってなんか作って売りながら旅しようかと。」

「ふむ…雅君、君さえよければなんだが、うちの養子にならないかい？」

…はい？この方は何を言ってるんでせう？

「あら、いい考えじゃない。」

あ、今のは桃子さんです。いまさらですがここには恭也さん以外の高町家の皆さんが勢ぞろいしております。

「つてことは、雅君が家族になるってことよね？」

ようやくまともなセリフの美由紀さん。



「それって本当!？」

そしてやたらとテンションの高いなのは。ってちょっとまで!

「いやいやいや!なんでみんな乗り気!?こんな素性も知れない相手だよ!？」

「君は私を治してくれただろう?それなら悪人でないことはわかる。」

「…そんなでいいんですか？」

「」「もちろん」「」

…こりゃかなわんわ。

「えっと、それじゃあお世話になります。」

こうして、俺は高町家の一人となることが確定した。

…そういえば。

「あの…俺、戸籍とかないですけど?」

「心配いらないよ。用意するから。」

…どうやって?

流石に怖くて聞けなかった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6125s/>

---

チートに原作ブレイクの旅

2011年9月8日01時21分発行